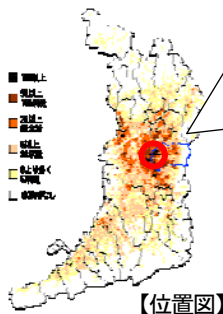


モデル事業名	モノづくりのまちシティプライト醸成事業
活動団体名	高井田まちづくり協議会
ホームページ	http://www.takaida.jp/
所属/ 担当者名	高井田まちづくり協議会（高井田西公民分館内） 平井義郎
連絡先	〒577-0066 東大阪市高井田本通4-7-17 TEL・FAX：06-6781-3380
活動地域	大阪府東大阪市西部工業集積地区

● 活動地域の概要

大阪市との境界、国道308号、府道大阪枚岡線に凡そ囲まれる工業地域で、面積は約160ha。東大阪市で最も工業集積度が高い。地域内には約10,000人が住み、1,000あまりの製造業企業が立地、約8,000人の従業員の方々が働く。



**大阪府東大阪市
西部工業集積地区**

大阪府内陸部の圧倒的な工業集積地
(色が濃い所ほど工業が集積)

【位置図】



【中小企業が立ち並ぶ高井田のまちなみ】



【工場跡地が住宅に転換】

● 活動地域の課題

○地域の担い手の減少、コミュニティの衰退

西部工業集積地区は、日本を代表する工業地域でありながら、人が住み、地域活動の盛んな地域である。しかし、その担い手・牽引役を務めていた町工場主や商店主が事業を閉鎖する、高齢化が進む、または地域に住まず地域と縁のない企業が増加するなど、従来の職任一致または職任近接のコミュニティは崩壊の危機にある。工業集積としての産業立地需要は依然非常に高く、地価も最近2年で倍になるほどであるが、ここ15年で人口3割減、事業所2割減、従業員数3割減と、地域を支える担い手が激減している。その結果、住と工の間でのトラブルが発生したり、元気な企業が転出したり、地域への誇りや愛着が希薄になっている。

○家業の後継者難、技術の途絶え

西部工業集積地区には金属・機械をはじめ多様な製造業業種が集積し、オンリーワン企業も多く存在する。機械や技術の高度化が進んでいるが、今まで親方職人から継承された技術は今の40代が最後の世代。機械設備が進歩した現在、製造業の新規起業は困難なこともあり、日本のモノづくりを支えている家業の基盤技術産業がここ10～20年の間に急速に失われる恐れがあり、産業集積としての地域間競争に不安が残る。

○現場モノづくり教育ニーズへの受け皿が未整備

高校、特に工業高校は、地域企業への就職率向上、優秀な企業での現場体験やインターンシップを求めていることが明らかになったが、行政や地域での受け入れ窓口がなく、有効な連携が図れていない。

● 活動の内容

・『高井田モノづくり体験塾』の概要

高井田まちづくり協議会は平成20年度より『高井田モノづくり体験塾』を開催している。体験塾の実施により、学生がモノづくりの達人を訪問し、異質な者同士の出会いの感動を、聞き書きの手法を用いて地域内外に共有し、わが国を代表する産業集積の企業・達人がモノづくりを通して培ってきた価値観や地域文化を地域ぐるみで次世代に継承し、まちへの自負の醸成、人材・技術の継承を図る。

■『高井田モノづくり体験塾』プログラムのフロー図



・平成20年度

初年度は、『森の聞き書き甲子園』を参考事例とし、関係者のアドバイスをいただきながらプログラムの構築を行った。プログラム構築後は参加企業の呼掛け、参加生徒募集の目処をたてるため高校へ訪問し、ヒアリングを行った。その後、9月末から参加生徒を募集し、体験塾を実施した。実施に際しては、パブリシティ活用、協議会サイト作成、作品集の作成などで事業の周知にも力を入れ、地域のまちへの自負の醸成を図った。

・平成21年度

2年目は、事業の継続性を意識し、以下の4点を新たに取り組んでいる。

- ①学生が参加しやすい時期設定 ⇒オリエンテーション実施時期を早め夏休みに設定した。
- ②体験塾の趣旨に賛同する学校との連携プログラム構築 ⇒高校ヒアリングで体験教育の現状を伺い、連携の可能性を模索。布施工科高校と高井田まちづくり協議会が協力関係を築き、PTA「ものづくりフィールドワーク」を実施し、中学校出前授業を計画している。
- ③参加学生同士の交流の機会設置 ⇒参加学生と地元職人を交えたバーベキュー交流会を開催した。
- ④企業協賛の可能性模索 ⇒朝日新聞社の協力を得ることが出来、募集案内を全国の工業高校、関西の高校に送付。また、聞き書き作家塩野氏との連携も強まり、塩野氏自身による高井田の職人への聞き書き及び出版が決定した。

● 活動の成果

・平成20年度

○活動の成果

参加生徒15名、参加企業21社、メディアへの掲載（朝日新聞、産経新聞、読売新聞、東大阪CATVなど）、高校の先生との出会い、フォーラム参加者69名

○地域への効果

- ・参加学生とモノづくり達人の出会いが「モノづくり・地域への誇り・自負」を生んだ。
- ・上記の想いが地域に伝播し、新たな地域コミュニティの芯としての可能性が生まれた。
- ・将来を担う教育機関と企業とのつながりが生まれた。
- ・協議会の主目的である地域ルールの合意形成にプラスに働いた。



【オリエンテーション開催】



【達人の訪問】



【フォーラム開催】



【協議会サイト設立】



【作品集の作成】

● 平成21年度

○活動の成果

- 参加生徒10名、参加企業22社、メディアへの掲載（朝日新聞、東大阪商工月報など）、高校の先生との出会い
- ・朝日新聞社の教育関連ネットワークを活用させて頂き、参加生徒募集案内を全国の工業高校、関西の高校に配布
 - ・前回体験塾の参加生徒が今回は聞き書きの指導者として参加する循環が形成
 - ・布施工科高校と新たな連携プログラムの実施・計画（保護者向け企業見学ツアー実施、中学出前授業の計画）
 - ・塩野氏が地域のポテンシャルを評価してくださり、高井田を舞台に取材・出版の準備が進行中



【朝日新聞協力で募集案内配布】



【オリエンテーション開催】



【達人の訪問】



【参加生徒交流会】

● 今後の課題及び展望

・課題

1. 『高井田モノづくり体験塾』の事業継続

- ・協力企業の確保
- ・学校との連携の強化（コーディネート役を学校へシフト）
- ・協賛企業・協力機関の確保

2. 『高井田モノづくり体験塾』への地域の関わり方を広げる

地域への体験塾の認知度は高まっているが、実質の協力者は20数社の企業や近隣高校が主になっている。今後、地域の多様な主体を巻き込み、モノづくりのまちとしてのシティプライド醸成の動きが課題である。

- ・小学校・中学校からのモノづくり教育の普及
- ・地域に息づくモノづくり文化を地元コミュニティと共に見直し、全国に向けた伝承・PR活動の展開
- ・学校と連携した地元就職活動の支援

・展望

長期的な目標としては、モノづくりのまちとしての自負の醸成、人材・技術の継承を掲げている。具体的には現在検討中の地域ルールの合意形成、操業環境の保全と住環境の向上、地元学校の地元就職率の向上である。また、布施工科高校など周辺教育機関との連携を強化し、モノづくり教育を充実させる。